モノ・グラフ

傾く椅子
一脚二役 早変わり

近藤雅樹（こんどう まさき）
民博 民族文化研究部
専門は民俗学・民具研究。しかし、いろいろなことに興味をそそられる性分だからか『おんな紋』（河出書房新社、一九九五年）、『霊感少女論』（河出書房新社、一九九七年）などの著書もある。

椅子卓
クッション付きの座板は嵌め込み式

この夏、横浜開港一五〇年記念のイベントがらみで馬車道のビジネスホテルに泊まった。そこで眼にしたのが上の写真の椅子。写真を見れば一目瞭然、無類感心、不要解説。

職業柄、とにかくビジネスホテルをよく利用する私。でも、廉価なコンビニエンスホテルばかりだから、客室にサイドテーブルを備えているところはまずない。

ベッドに腰掛けてテレビを見ながら「ちょっと一杯」というときには、どうしても椅子のクッションが気になってしまう。注いだワインがこぼれはしまいか、グラスが転がらないかと、心配で、心配で、落ち着かない。くつろげない。で、グラスに手を添えていて、ときに度を越してしまうことも……。夜食にカップ麺を食べるときも同じなのだけど。

だから、感心した。この「椅子卓」を考案した人物と、客室のインテリアに取り入れたホテルの経営者の双方に。

「メーカーはどこかな?」と探したが、商標がない。作りつけのテレビ置台（いちおうは机）と同じ色のラッカー仕上げだったから、このホテルのオリジナル仕様なのかな。正直「ほしいな」と思った。でも、灰皿とはわけが違うからなあ。

若いころからロッキングチェアとマッサージチェアをほしいと思っていた私だけど、それらを超えて魅了されるなにかがあった。痒いところに手が届くという、あの感覚だ。

椅子卓の説明パネル
背後の説明図にしたがって装着し直すとテーブルに早変わり

＊

世の中には、いろいろな便利商品を考案したり、製作販売したりする人たちが大勢いる。一攫千金を夢見てだろうか、特許・実用新案出願を生きがいにしている人たちだ。そして、こうした人たちの発明が、まれにヒットすることがある。「椅子杖（いすづえ）」がそれだ。

万歩計を提げて散歩に出かけたものの、途中でくたびれたときに便利だという。おもしろ半分でネット検索してみると、二〇〇二年に酒井正雄、翌年に佐々木健という人物が、それぞれ特許出願していた。

そういえば、当時、円盤つきの杖を持ち歩いている老人の姿を、ちらほらとだが見かけたものだった。でも、近ごろはまったく眼にしない。

民博には「椅子枕」もある。ケニア共和国などで伝統的な習慣をまもって暮らしている人たちが携行するもので、頭とお尻のどちらを載せてもはばからないという点では、旅館の座布団に通じるものがある。

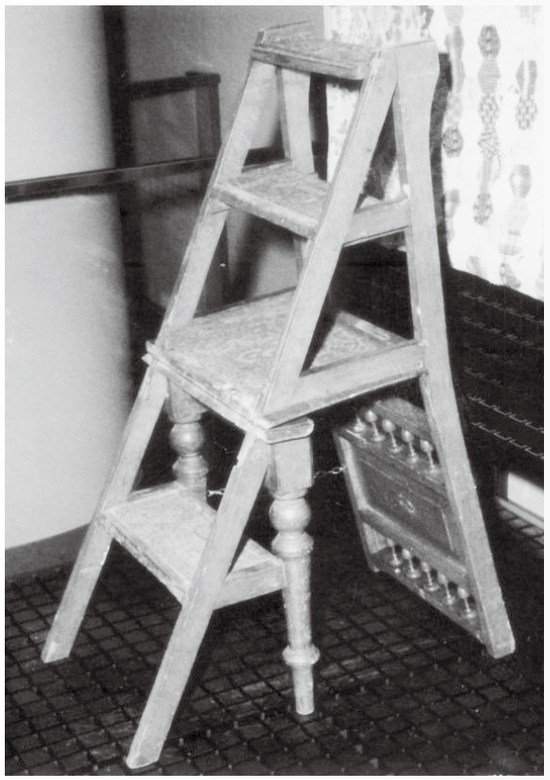
＊

同じ腰をおろすものとしては、下の写真の「本棚用踏み台」が出色だろう。民博のヨーロッパ展示場で初めてこの標本資料を眼にしたときは感動した。

「ユークリッド幾何学の、おお、なんというすばらしい実践！」と、そのように言ってしまっては、いけないのかな。

三〇年前に、ロンドン市内のアンティークショップでこの掘り出し物をゲットされたのは、大丸弘先生（現在・民博名誉教授）だった。「本の虫」の本領発揮に脱帽。

当時の大丸先生は、椅子ハンターだったようだ。「悪趣味なイスたち」と題して、本誌第五巻一〇号（一九八一年）に写真を添えて披瀝されている。これを読めば、そうか「おまる」は椅子なのだと納得する。エレベーターの実用化に椅子が深く関与していたことも。

椅子以外の用途をあわせもったそれらの「椅子」は、模様替えをすませるまでの四半世紀近くをヨーロッパ展示場で過ごしていた。今は、第二収蔵庫に配架されて休んでいる。お披露目疲れしきっていた身体を癒すために。

本棚用踏み台
裕福な新興都市住民のあいだで重宝された多用途家具の一種。受け入れ当時の記録によれば、製作されたのは1880年